

善隣

No.537 通巻804

2023年（令和5年）7月1日発行（毎月1日発行）

2023

7



日頃から協会運営にお力添えを賜り、誠にありがとうございます。

このたび、第12回定時社員総会後の臨時理事会で代表理事・会長に選任され、職務に当たらせていただくことになりました。2013年から10年間にわたり協会のご指導をされてきた矢野一彌前会長の後を引き継ぐことになり、

身の引き締まる思いでございます。

私は、昨年

6月に特別委

員会である「将来検討委員会」の委員長を拝命し、5人のメンバーで協会の「将来のあるべき姿」を討議してまいりました。そして協会は今後、組織や運営の合理化、スリム化を推進すべきとの提言をまとめ、先の社員総会においても報告させていただきました。

本年は創立82年目に入るこの協会の長い歴史と輝かしい伝統を鑑み、

未来に向けて先輩たちが掲げてきた「国際親善」のための貢献をいかに果たしていくか、変革の激しい真つただ中で、会員みなさまと共に考え、力強く邁進していきたいと思っております。これまで以上のご指導、ご

代表理事・会長就任のご挨拶

会長 藤沼弘一



協力を切にお願い申し上げます。

私事について少し述べさせていただきますと、私は、昭和18年5月8日に満洲国吉林省吉林市で生まれました。昭和22年2月に家族と共に大連港から舞鶴港への「引揚」を体験しました。父は明治42年に大連北方100キロほどの瓦房店というところ

ろで生まれ、祖父は千葉県出身の農家の次男坊で、いつしか写真屋の技術を身に付け、32歳のときに、当時22歳の祖母を連れて清の時代の大連に渡り、瓦房店で「藤沼写真館」を開店しました。これが明治40年のことで、日露戦争で勝利した日本がロシアから割譲された後の南満州鉄道の沿線に最初に渡った日本人だったようです。私のルーツは、満洲っ子というより

も大陸っ子の3代目のような気がしております、この善隣協会にも不思議な縁を感じている次第です。

末筆になりましたが、会員みなさまのますますのご発展とご健康を心よりお祈り申し上げます、簡単でございますが、就任のご挨拶とさせていただきます。

善 隣 目 次 2023年 7 月号

代表理事・会長就任の挨拶藤沼弘一

公開講演会記録

歴史から見たロシア・ウクライナ関係と今後の展望黒川祐次 2

中国残留そして祖国で
——日中友好交流80年の旅路.....橋村武司 12

淑子、澄子、嵐子、そして満洲
～『タンゴ タンゴ タンゴ』を上梓して思い出すこと～大類善啓 20

陶々俳壇馬場由紀子 27

中国ウォッチング編・訳 上松玲子 28

協会通信・同好会だより 30

2023年 7 月の行事予定..... 31

善 隣 第537号 通巻804号
2023 (令和 5) 年 7 月 1 日発行
発行所 〒105-0004 東京都港区新橋 1-5-5
一般社団法人 国際善隣協会
TEL 03 (3573) 3051
FAX 03 (3573) 1783
発行人 藤沼弘一
編 集 原田克子
編集協力 朝 浩之、山谷悦子
印刷所 (有)ゆにおんプレス
TEL 048-834-1201
定価 一部400円 年額4,800円
振替 00120-0-145956
国際標準逐次刊行物 ISSN 0386-0345
©禁無断転載

みんなの写真館 30
(姜晋如、村田嘉明)

.....。.....。.....。.....
当協会は、中国ならびに近隣諸国
との相互理解を深め、友好親善・交
流を推進しています。
一般社団法人 国際善隣協会

歴史から見たロシア・ウクライナ 関係と今後の展望

元ウクライナ大使 黒川祐次



はじめに

私は1996年から1999年までの3年弱の間、ウクライナ大使を務めた。私はこの地域の専門家ではなかったが、赴任してみるとこの国が想像していたよりもはるかに大きな国で、しかも独自の歴史とユニークな民族を持った国だということがわかった。

ところが日本では、ウクライナという国はとも以下のように把握されていたようだ。すなわち、ウクライナは元々ロシアの一部だったのが、たまたま1991年のソ連の崩壊により、ソ

連を構成する15の共和国が棚ぼたのようにならざるを得なかった国の一つといった程度の認識だったと思われる。換言すれば、ウクライナは基本的にはロシアと同質の国なので、その独立はそれほど必然性のあるものではなかったようだということだ。日本に届くウクライナに関するニュースもモスクワ経由が多く、当然のごとくロシア・バイアスがかかっていた。

キーウに住んで、私はこれは違うと感じ、ウクライナから見たウクライナの歴史を書こうと思ったって、いろいろ調べて2002年に中公新書『物語

ウクライナの歴史』を出版した。

今回のロシアによるウクライナへの軍事侵攻は、国連憲章をはじめとする国際法に真っ向から違反する侵略行為であり、決して許されるものではない。ロシアとしてもそのくらいのことにはわかってはいるはずである。それにもかかわらず、なぜこれほど明白に法、正義そして人道に悖る行為をロシア、またプーチン大統領が強行したのか。これは単にウクライナをめぐる現在のヨーロッパの勢力関係を分析するだけでは十分わからないのではないかと、やはり入りくんだロシアとウクライナの関係

の歴史を見なければよくわからないのではないか。

本稿では、紙面の制約もあるので戦況については省略して、前半においては、なぜプーチンは侵攻に踏み切ったのかをロシアとウクライナの歴史の絡み合いの観点から見ていく。また後半においては、今後の見通しとこの戦争から見えてきた事実と問題点について触れたい。

1. ウクライナとロシアはどこが違うのか？

(1) キーウ・ルーシ大公国が共通の先祖

現在のロシア、ウクライナ、ベラルーシ3国の共通の先祖は、10〜11世紀に栄えた東スラヴ民族最初の大国である「キーウ・ルーシ大公国」である。都はキーウ（キエフ）だった。

キーウ・ルーシは初めてキリスト教（東方正教会、ロシア正教会）を受容した。そのためキーウはロシア正教の発祥の地とされ、ロシア人にとっては心のふるさととなっている。

なお、当時モスクワは地図にも載らないような北方の辺境の寒村であった。ところが13世紀にモンゴルが襲来し、

大公国の中心であるキーウは陥落して、同大公国は分裂状態となる。キーウを中心とする現在のウクライナ地域の荒廃は著しく、リトアニア、ポーランドなどの近隣国の餌食になってしまった。

ただ17世紀には、近隣諸国の支配下にあったウクライナにおいても、荒れはてて無人地帯になっていたその地に近隣諸国の過酷な支配から逃れてきた人々が住みつき、コサックという共同体を形成した。コサックは自衛のために武装したが、次第に強力となり、一時は事実上の独立国を形成した。短期間ではあったが、それが後のウクライナ民族の誇りと精神的拠りどころになっている。

その間、北方の小国だったモスクワ公国が台頭し、地域の強国にのし上がっていった。それにつれて、モスクワはルーシの後継者を自称し、国名も「ロシア」（ルーシのギリシヤ語形）と変えて、名実ともにルーシの後継者とな

ろうとしていくことになる。

そしてモスクワ（後のロシア）は17世紀後半よりウクライナを侵蝕し始め、18世紀末のエカテリーナ女帝の時代にはウクライナの大部分を支配下に収めた。「分家が本家を乗っ取った」形だ。以来、200年以上ウクライナはロシア帝国およびその後身のソ連に支配されることになる。第一次世界大戦の混乱期にウクライナは独立運動を起し、短期間独立を達成したが、まもなくボルシェヴィキに潰され、ソ連を構成する一共和国となる。そして1991年のソ連崩壊によりウクライナはようやく念願の独立を達成することになる。

(2) なぜウクライナはロシアに征服されたのか？

なぜキーウ・ルーシの中心であったウクライナの地が、かつては辺境だったモスクワに呑み込まれてしまったのか。それについては以下の3点が指摘される。

①専制体制をつくったモスクワ（後の

ロシア)が先に強国になった

専制国家は分権的な国家より国力を集中できるので、強い国家になりやすい。モスクワおよびその後身のロシアは専制体制を身につけ、それを代々の君主が受け継いだため、隣国より強い国になり、近隣地域を併合していった。なぜモスクワが専制的になったかについては、以下の説がある。

一つは、モスクワは長く遊牧民族に支配されて、リーダーに従う遊牧民族的な習性を身につけたというものだ。二つ目は、早い時期から他民族を支配していたので、専制的にならざるをえなかったというものだ。三つ目は、専制を取り入れたモスクワ(後のロシア)が成功したため、そのモデルが代々引き継がれたというものだ。そして四つ目は、ソ連時代に共産主義のプロレタリア独裁で補強されて、専制指向が一層強固になったというものだ。

②ウクライナは地の利が悪かった、また同時に土地が豊か過ぎた

ウクライナの地は、中・南部はステッ

プ(草原)地帯で、遊牧民族が必ず通る道にあり、頻繁に蹂躪された。その点、ロシアは北部の森林地帯にあって遊牧民の関心が薄く、被害が比較的少なかった。これが、ウクライナの独立のためには地の利が悪すぎたという意味だ。

土地が豊か過ぎたということは、そのステップが黒土地帯で地味が豊かであり、近隣の垂涎の的となったという意味だ。古代・中世はもちろんのこと、近・現代になると、北からはロシア、南からはオスマン、西からはリトアニア、ポーランド、ドイツなどに侵略され、また支配された。

つまり、ウクライナは常に周辺の民族や国家から狙われ、占領されたため、独立するための余裕が与えられず、出遅れてしまったのだ。西欧でいえば、独・仏に挟まれたベネルクスやアルザス・ロレーヌ地方に似ている。

③専制体制を好まなかったウクライナでは、長続きする世襲王国ができなかった

キーウ・ルーシ大公国は分権的で、

ゆるやかな諸侯の連合体だったため、モンゴルに一致団結して対抗できなかった。ウクライナは、この専制を好まないキーウ・ルーシの気風を受け継いだのではないか。また一時期、コサックは国家に近いものをつくったが、その首長は選挙で選ばれ、解任もされた。当時、世襲の王のいない国は近隣国から独立の国家と認められず、他国の庇護を求めなければならなかった。その間に、近隣国は専制の世襲国家となり強力になっていった。つまり、ウクライナは専制的にならなかつた、または専制的になれなかつたために出遅れ、その間に先に専制的になったロシアに征服されてしまったということであろう。

ウクライナは第一次世界大戦中に一時独立したが、独立を永続的なものにするワシントンや毛沢東のようなカリスマ的な「建国の英雄」は現れず、独立は長続きしなかつた。

1991年の独立後も、長年の帝政・共産主義支配下にあったにもかかわらず、自由・民主主義がすぐ定着した。選挙も比較的公正で、政権交代も行わ

れた。その代わり、独立後、開発独裁も生まれず、経済発展が遅れた。ここでもキーウ・ルーシやコサツクの伝統が引き継がれているのではないかと思われる。

(3) ウクライナを取り戻したいロシア

ロシアは実利面、精神面の両面からウクライナを取り戻したいと考えている。

実利面では、ロシアが大国になれたのはウクライナを取り込んだからだという人さえいる。ソ連時代でも、ウクライナはソ連の産業・人材供給などの面で大きなシェアを占め、不可欠な存在だった。現在のロシアでも、衰退傾向にあるロシアを超大国に戻すにはウクライナを再びロシアへ引き戻すことが必要だとの意見は根強いようだ。

精神面では、ロシアはウクライナを2世紀以上支配していたため、ウクライナを自国の一部と思い込んでしまった。ところが1991年のソ連崩壊で、そのウクライナが突然離れてしまい、欠落感をぬぐえないでいる。特に歴史の点では、「キーウのないロシア」は「京都・奈良のない日本」のようになって

しまい、古い歴史を持つ由緒ある大国と言いつらくなってしまった。宗教の点でもロシア正教発祥の地であるキーウがないと精神的にも落ちつけない。結局、ロシアは栄光あるキーウ・ルーシの正統な後継者と名乗るためには、キーウのあるウクライナがないと困るのだ。

(4) ロシアから離れたいウクライナ

上記に対して、ウクライナ人は以下のように言う。

①ロシアとウクライナは似ている面も多いが、違う民族なので独立して当然だ。その証拠に、ウクライナは何世紀もロシアからの独立のために戦ってきた。独立したこともある。一度独立した民族はもはや昔の隷属に戻ろうと思わない。

②ロシアは、自分がルーシの後継者なのでウクライナはロシアの一部だとするが、キーウのあるウクライナこそがルーシの正統な後継者だ。

③今のウクライナは価値観も欧米に近い。ウクライナには自由や民主主義が定着しているが、ロシアにはない。ま

たロシアのような専制主義も大国主義もない。

④ウクライナの将来を考えても、ロシア式の政治・経済の下ではウクライナに未来はない(特にこの意見は若者に多い)。ロシアと一蓮托生にはなりたくない。

⑤国際法上も、1991年の独立以降、ロシアはウクライナの独立と国境の保全を条約で何回も約束してはいないか。⑥これまでロシアとの協調に努力してきたが、クリミア併合と今次侵攻で限界を越えた。

(5) ロシア人とウクライナ人の国民性の比較

共通点としては、逆境に強い、歌・詩が好き、大雑把、男はマッチョ、女は家庭的が好まれる、等々の点が指摘される。

ロシア人の国民性としては、暗い、哲学的、空想的、集団主義、独裁を許容、暴力的などと言われ、ウクライナ人は、明るい、抽象論に関心がない、現実主義、個人主義、一致団結しない、

独裁嫌い、などと言われる。ロシア人をドイツ人、ウクライナ人をイタリア人に比する人もいる。

2. なぜ今回プーチンは軍事侵攻したか？

前述の一般的なロシア人のウクライナ観を一層先鋭化し、ウクライナをロシアに取り込むことの正統性を理論化しようとしたのがプーチンである。

(1) プーチンの歴史観

プーチンは根っからのKGBで、子どもころからKGBに憧れてきたようである。彼の柔道好きもKGBと無縁ではないようだ。

KGBはソ連の諜報機関であるが、ソ連のイデオロギーには関心がなく、その使命はもっぱら大国としてのソ連をリアリズムの観点から守るといふことであつた。プーチンもこの考えに全く同化しており、彼は共産主義の凋落には慚愧の念もなく、もっぱらソ連という超大国が凋落してしまったことを悔しく思っており、ロシアを超大国に

復帰させたいと思っているようだ。具体的には、以下が彼の考えだと思われる。

- ①ロシア帝国とソ連が世界の超大国だったことに大きな誇りを持っている。
- ②その大国ソ連は1991年に崩壊したが、これは西側に仕掛けられたもので許せない。
- ③今のロシアは衰退傾向にあるが、その挽回が自分の歴史的使命だ。ピョートル大帝に並びたい。
- ④旧ソ連の版図の回復が大目標だが、その第一段階は最も重要なウクライナを取り戻すことだ。
- ⑤ウクライナは本来ロシアの一部なので、それを取り戻すことは他国への侵略ではない。

(2) なぜ今侵攻か？

プーチンは、NATOの東方拡大、ジョージアのバラ革命、ウクライナのオレンジ革命、キルギスのチュリーップ革命などにより、ロシアが追い詰められているとの危機感を強め、反撃が必要との感を強めていった。その最初の反撃

が2008年のジョージアの南オセチアへの侵攻であり、次の大きな反撃が2014年にウクライナのマイダン革命をきっかけとして起きたクリミア併合、ドンバスへの軍事介入であつた。

このクリミア併合、ドンバス介入はプーチンとしても大きな賭けだつたと思われるが、あつけないほどの成功であつた。ウクライナ軍は無抵抗だつたし、米欧からの対露制裁も耐えられる範囲内であつた。

これに自信を得たプーチンは次の機会をうかがっていたのであろう。その準備の一環としてウクライナ併合を歴史的に正当化するために、2021年7月に『ロシア人とウクライナ人との歴史的な一体性』という「大論文」を発表した。ここでは、ロシア人とウクライナ人は同根で、同民族であり、ウクライナの主権はロシアとのパートナーシップの中においてのみ可能であることなどが延々と論じられている。こうして侵攻の理論的準備を完了して、侵攻時期を決定した際には以下の考慮があつたと推察される。

一つ目は、クリミア併合の成功体験だ。前回同様ウクライナ軍は大した抵抗もできないだろう。ゼレンスキー・ウクライナ大統領はしょせんコメディアンで、すぐ逃げ出すだろう。したがって今回も数日でキーウを制圧し、ゼレンスキー政権を打倒して、傀儡政権を樹立できるだろう。

二つ目は、一番気になる米国の反応だが、バイデンは弱腰だし、また彼は中国を主要敵としているので欧州の問題に国運を賭してまで対抗してこないだろう。

三つ目は、ゼレンスキーが反露政策に転じNATO加盟を急ぎ出したので、早めに止めないといけない。

四つ目は、2024年に自分の大統領選挙があるので、その時期から逆算する。

3. 今後の見通し

大きなことは戦争でしか決着しない。そして戦争で決着した結果は、平和時にこれを交渉で変更することは極めて難しい。これが歴史の冷徹な教訓である。

もしウクライナが領土の一部をロシア側に占領されたまま和平協定を結んだ場合、和平後にロシアはその領土返還の交渉に乗ってこないだろう。またいったん、和平ができる、味方も含め世界はウクライナのことを忘れてしまふ。朝鮮戦争がよい例であり、休戦協定はできたが朝鮮半島はその後何十年も分断されたままだ。

ウクライナ側もこのことは肝に銘じてよく知っている。中途半端な和平で終わっては、これまでウクライナ側が大きな犠牲を払ってここまで戦ってきた意味がない。また何世紀にもわたって続けてきた対露独立の闘いを、米欧などの軍事援助と国際世論の支援がある間に最終決着させたい。これがウクライナの人々の悲願であろう。

他方、ロシアも難しい立場にある。

ウクライナの戦闘力や士気、それに米欧などの対ウクライナ支援を見誤った。しかしロシアもせっかく彼らの「大義」を唱えて戦争を始めた手前、何も得ないでは自ら止められない状況に陥っている。そうなった場合にはプーチンは地

位どころか自分の身さえもどうなるかわからない。ロシアは当初の目標を下げ、最低限度面子の保てる南部4州（旧ノヴォロシア）、あるいはもっと譲歩してドネツク2州の完全掌握でも和平をしたいところかもしれない。しかし、そうなればウクライナは勢いづいて、そこで矛を収めることはないだろう。

予想されているウクライナ側の春の大攻勢がどうなるのが分岐点になる可能性もあるが、ロシアは基礎体力がある国なので、低レベルの戦闘を継続する力はあるだろう。いずれにせよ、戦闘ないし外部で何か大きな出来事が起きない限り、戦闘が続かざるをえないように見える。

4. 今次戦争が明らかにした事実と問題点

この戦争はまだ終わっていないし、今すぐ終わる見通しも立てにくい、これまでもわかってきたことがある。そのいくつかを紹介して締めくくりとしたい。

(1) ロシアという国の真の姿が明らかになった

ロシアという国は半ば閉ざされた国であるので、その実態はいろいろ想像されてきたが、今次戦争でやはりそうだったのかという事実が確認された。そのいくつかをあげる。

ロシアは、19世紀、または20世紀前半の世界観・戦争観を持ち続ける時代遅れの国であることがあらためて確認された。

ハードの面では資源と武器以外は国際競争力がなく、軍事大国だが、経済小国といういびつな構造を持つ国だ。ソフト面では世界を納得させ、リードする価値観を持たない国でもある。結局、物質面でも精神面でも魅力のない国だということを示した。だからこそ、衛星国だった東欧諸国も、ソ連に組み込まれていたウクライナもバルト3国も皆、ロシアから逃げ出し、EU、NATOに入りたがった。これはロシア自身の失敗が招いたことで、自業自得だ。

強そうに見えた軍も案外弱いし、結局、核で脅すしか手段のない国だ。

「巨大な北朝鮮」のようだ。

また国際的にも、真の友・同盟国のない寂しい国だ。力でしか他国を動かせない国でもある。

そしていくらでも嘘をつく国、自己正当化を図るために平気で詭弁を弄する国だ。かつて岡崎久彦氏は、日露戦争以前のロシアの外交を調べて、「ロシアの言葉は無視し、その行動のみで判断せよ」と述べたが、それは今でも正しい。

そして最後に、ロシアは本心ではより欧州的なロシアの実現を望んでいるのに、逆に欧州を敵に回し、内心は望んでいないのに中国への依存を一層深めざるをえないという皮肉な結果となっている。これではロシアの衰退は不可避だろう。

(2) ウクライナという国が初めて世界で認知された

ウクライナという国は独立後、日も浅いこともあり、これまで特に注目されてこなかった。2014年のクリミア併合の際、あまりにも無抵抗だった

ため、評価はむしろ低かった。

それが今回の戦争でウクライナが潜在的に持っていた底力が独立以降初めて発揮された。コサックに代表される歴史的なウクライナ人の独立心、不屈の精神が復活したし、ゼレンスキー大統領の勇氣とコミュニケーション能力に皆が驚いた。

独立後の経済は低迷を極めたが、それでも兵士のレベルがロシア兵よりもかなり高いことが証明された。ウクライナが教育熱心であることは一部で知られていたが、この戦争で証明された。特に理数系のレベルは高く、AI駆使能力が戦果にも影響している。AI担当のフェドロフ副首相は「ウクライナのオードリー・タン」と呼ばれるほどである。民生面でも、ウクライナは「東欧のシリコンバレー」という人もおり、平和到来の折にはIT産業が花咲くであろう。

国際安全保障の面では、ウクライナは、自分の戦争を戦っていると同時に、「欧州の盾」となって戦っている側面もある。ウクライナがロシアの勢力圏

に戻ってしまふことになれば、ヨーロッパ全体の安全保障は極めて脆弱であることが危惧される。その面からもウクライナの重要性はあらためて認識されたと言つてよいであろう。

(3) 西欧、特に独・仏の「平和ボケ」

がかなり是正されたがまだ不十分

これまで独・仏はロシアに遠慮して、米国が提案したウクライナのNATO加盟提案に反対してきた。もし加盟させていれば、今回の侵攻は起こりえなかっただろう。独・仏は2014年のクリミア併合にも微温的な反応しか示さなかった。さらには、ロシアに有利なミンスク合意をウクライナに呑ませた。これがロシアを付け上げさせた一因になった。

侵攻後、独・仏の態度はかなり変わったが、内心ではあまり変わっていないと思われるふしもある。

このウクライナの問題は本来ヨーロッパの問題であり、ヨーロッパが主体性を持って解決しなければならぬ問題であるにもかかわらず、弥縫策に傾き

がちであり、そしていざとなれば米国に頼るとの昔からの傾向は変わっていない。

(4) 大国による核使用の脅しが初めて

現実の問題となった

NATOやEU全体のGDPはロシアより圧倒的に大きく、通常兵器だけの戦いならNATO側は勝てるのに、「核で脅せば大国もひるむ」がかなり効いた。

米欧側は、ロシアがいざとなったら核を使う用意があるのか、それともそんな気はないが通常兵器の戦争では勝ち目がないので使うふりをしているだけなのかよくわからないという状況に振り回され、対露強硬策を手控えてきた。ロシアはこの手を今後も使い続けるだろう。

もしこの脅しがこのまま世界に通じるのなら、核の脅しを使っても大きなお咎めなしということになり、世界の秩序にとり大きな脅威となる。核の拡散も起こりかねない。どう解決していくかわからないという極めて深刻な問

題である。

(5) 国連が機能しないときに、戦争を防止する方法はないのかという問題を突き付けた

世界の平和を守るために創設され、それを守るのが最大の任務である国連が、安保理常任理事国が他国を侵略した場合には何もできないということの世界はあらためて知らされた。しかし今回のように誰から見ても憲章違反明白々の侵略行為が、拒否権があるからといって見逃されるようでは、そもそも国連の存在意義が問われることになるし、現実には世界の平和も維持できないことになる。

残念ながら、これに対する明快な対策はない。目下のところは国連総会が侵略国に非難決議を出すか、国際刑事裁判所が逮捕状を出すのがせいぜいのところである。この二つはすでに出されておき、国際法的・道義的にどちらに非があるかを明らかにする点では大きな意義はあるが、侵略を抑止したり、始まった戦争を止めさせるほ

どの力はない。さらに、前述の核の脅しと同様、これも真似をする国が出てきかねない。

5. 日本とウクライナの意味合い

この戦争は遠いヨーロッパの戦争ではあるが、日本にも大きなインパクトを与えている。

(1) 日本の安全保障体制をあらためて考えさせられた

まず日米安保条約の重要性をあらためて再認識させた。これは、私が2014年キーウで会った元ウクライナ外相が、「日本は日米安保があって羨ましい」と言ったことから明白である。確かに、ウクライナが2014年当時にNATOに加盟していたなら、このような侵略行為は起こらなかったであろう。またウクライナは専守防衛、非核三原則を遵守してきた国で、その面では日本とよく似ている。戦争を回避するために必死の外交も行った。それでもウクライナは侵略された。これは日本にとっても厳しい現実である。

さらに、自らも戦ってこそ外国の支援を得られることもわかった。クリミア併合時にウクライナは戦わなかったので国際社会の支援を十分得られなかった。今回はウクライナ自身が必死の覚悟で戦っている。はじめは及び腰だった米欧も、これを見て本格的な軍事支援に乗り出した。日本では日米安保があるから米軍に守ってもらえばいいという雰囲気は支配的だが、それでは日米安保さえも機能しない恐れがある。

(2) 欧州とアジアの安全保障が連動してきた

日本は遠いヨーロッパの戦争でも、国連憲章に明白に違反する侵略行為として強くロシアを非難し、ウクライナを支援し、G7やヨーロッパ諸国との連帯を表明している。権威主義的な大国と近接していることは東アジアもヨーロッパも共通している。つまり安全保障上もヨーロッパと東アジアの状況は似ているし、ヨーロッパと同様なことが東アジアでも起こりかねない。そういった場合、価値観を共有する日本と

ヨーロッパが協力し合うことは有意義である。功利的に言っても、欧州で貢献しておけば東アジアでの有事の際に欧州の支援を期待できるだろう。

(3) ウクライナはヨーロッパにおける大親日国になる

ウクライナは以下の点ですでに親日国である。

① 独立以来の日本の対ウクライナ支援は、ODA、その他の金融支援、チャルノービリ支援など相当額にのぼっており、ウクライナ人はそれをよく知っている。

② お互いに共通の隣国ロシアに領土を占領されていることからくる連帯感がある。

③ ウクライナは日露戦争時からすでに親日だった可能性がある。これはまだ十分実証されていないが、当時、ウクライナはロシアからの独立を望んでいたため、内心では日本を応援していたが、ロシアの一部となっていたのでそれを公言できなかったのではないかと。現にロシアの隣国で、ロシアに苦し

められていたフィンランド、ポーランド、トルコは、東洋の小国日本が日露戦争でロシアに勝利したことで元気づけられ、それ以来、大の親日国となって今日に至っている。私はこれを「ヨーロッパの親日ベルト」と名づけているが、ウクライナもこの列に加わるだろう。

(4) 意外に日本の近くにいるウクライナ・ディアスポラ

19世紀末から20世紀初頭に当時のロシア政府は、ロシア極東地方（ウラジオストクヤハバロフスクの地域）を農業で開拓するために多数のウクライナ人を移民させた。その移民はロシア人よりウクライナの方が多かった。それは農業で開拓するためには自立農民の多いウクライナ人が適当と判断したからのようだ。彼らが住んだ土地は「緑のウクライナ」とも「ウクライナの楔」とも呼ばれた。

第一次世界大戦、ロシア革命の混乱時に同地のウクライナ人は独立を模索し、議会をつくり、大統領を選び、軍隊まで組織したが、結局はボルシェヴィ

キに潰されてしまった。革命後も多くのウクライナ人が旧満州のハルビンなどに避難して、同地の日本軍に協力を求めた。日本側も関心を持ったが、結局何が実ることはなかった。

この事実は、最近日本およびウクライナの双方で研究が進んでおり、その接触の状況が明らかになりつつある。

今もロシアの極東地方の「ロシア人」はウクライナ系が多数派だと推察されるが、彼らがどの程度ウクライナ人の出自を意識しているかは不明だ。いずれにせよ、遠い存在だと思われるウクライナ系の人たちが案外近いところにたくさんいるということは興味深いことである。

（2023年3月23日・公開講演会）

筆者略歴（くろかわ ゆうじ）

1944年愛知県で出生。1967年東京大学教養学部教養学科国際関係論分科卒。1967年外務省入省。1994年在モントリオール総領事。1996年駐ウクライナ特命全権大使（1999年7月まで）。199

9年衆議院専門委員兼外務委員会調査室長。2001年駐コートジボワール特命全権大使（2004年11月まで）。2004年11月外務省退官。2004年12月ウクライナ大統領選挙日本監視団団長。2005年日本大学国際関係学部兼同大学院教授（2014年8月まで）。その間、学部次長、大学院国際関係研究科主任、日本大学評議員などを務める。

現在、「ウクライナハウス・ジャパオン」共同代表、日本コートジボワール友好協会会長、キール国際大学名誉教授、千代田国際言語学院名誉院長。

著書：『物語 ウクライナの歴史——ヨーロッパ最後の大国』中公新書、2002年。『*The Impact of Globalization on Japan's Public Policy*』The Edwin Mellen Press, USA, 2008。（共著）。『現代国際関係の基本文書』日本評論社、2013年（共著）、他。

中国残留そして祖国で

— 日中友好交流80年の旅路

天水会会長 橋村武司

はじめに

日中平和友好条約締結45年を迎え、新たに第一歩を踏み出した年。尊敬する周恩来元総理の生誕125周年の記念すべき年に栄誉ある講演の機会を与えていただき感謝する。紹介者の村田嘉明さん、新宅久夫さん、そして国際善隣協会の関係者および本日まで聴講して下さる方々へお礼申し上げます。

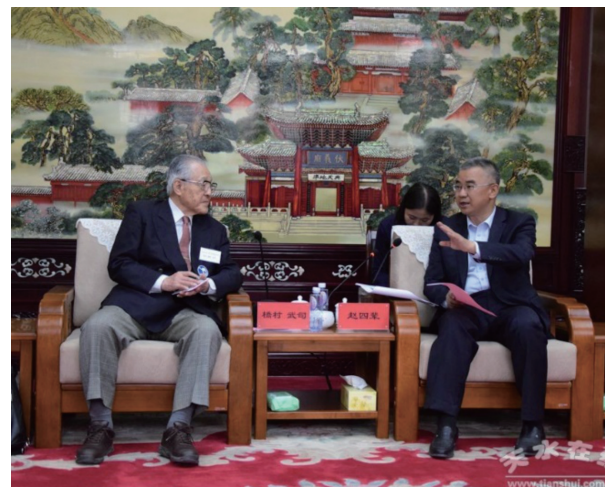
私は敗戦後、中国に残留(留用)し、成長の少・青年期を中国で過ごした。国共内戦の最中、生活は厳しく飢えも経験したが、中国の人々も同じような

境遇だったので、苦境をくぐり抜けることができた。また学問にも飢えた。

図らずも八路军の後方支援の仕事の機会を得て、新中国の建国のため微力ながら貢献できたことを誇りに思っている。鶴岡炭鉱では「太陽の下でなら何でもできる」との信条と自信を得た。今では中国を育ての親と思い、第二の故郷と思っている。

今日は、私が実際に体験・実践したことをお話しする。一つの事例として参考になれば幸いです。

1. 生い立ち



天水副市長(右)と対談(第10次天水友好訪問)

私は長崎県対馬厳原で昭和7年5月22日に生を受けた。父寿太郎は当時ハイクラなクリーニング店を開いていた。話によると上京した機会に白洋舎でクリーニングの技術を習得したとのことである。母は佐賀県白石の中農が実家で、早く母を亡くしたので、5人姉弟を母親代わりに面倒を見た苦勞人であった。生を受けて90年、幾多の苦境を切り抜け、頑強な体と精神力を授けてくれた母に感謝している。下の妹二人も80台後半、九州で元気に過ごしている。父は背が高く男ばかり7人兄弟の次男だったが、34歳の若さで大腸がんを患

い他界した。そして4人の弟たちも若

くして肺結核で欠け、残ったのは長男と七男になった。私は、祖父にとって初孫で男児だったので、大事に育てられた。祖父は佐賀の人で日露戦争参軍の勇士、硬軟両用、葉隠れ武士の特訓と襦袢の懐に抱かれてかわいがられた。小学2年生の時、父を亡くしたが、学習参考書片手に勉強を助けてくれた。また塾にも通わされた。お陰で小学1年から4年まで級長を務めた。一方、お山の大将には勝てず孤立していた。当時は戦時下、私の将来の夢は海軍士官、恰好良さに憧れた。厳原港には掃海艇が入りし、士官たちが洗濯物を託してくれた。取れた桜に錨のボタンは宝物であった。4年生になってからは、水泳、器械体操に進んで参加した。

父を亡くしてから、母は職人を雇い、一緒に仕事をしたが、店の経営はままならず、戦時下物資配給の時代になった。祖父の「満州のほうが安全かもしれない」とのアドバイスにより、店を畳んで満州ハルピンの満鉄社員の伯父を頼り渡満することになった。10歳の

時である。

戦中、ハルピンでの生活

当時のハルピンは植民地の都市だった。九州の田舎から移ってきた者にとっては、楡が舞い石畳を疾走する二輪馬車の風情は、エキゾチックで東洋のパリそのものだと思った。カルチャーショックは数々あるが、中でも水洗トイレの轟音には驚いた！ それに鼻の高い外人が堂々と昼間歩いている様も不思議だった。九州の学校では外人はスパイだと教えこまれていた。なぜ放置しているのか？ 学校では優秀な奴が多いのに感心した。長崎弁は大いに珍しがられた。不思議なことに、ハルピン放送局での詩の朗読の5人に選ばれたのには緊張した。恐らく先生が長崎弁をなおすための機会を与えてくれたと推測する。詩は「敵機はついに満州を襲った」、トップバッターはM君、二番手が私、次が隣に住むS君。

ベテランの男性アナウンサーから2か月間徹底的に訓練を受け仕込まれ、無事故送を終えた。ご褒美に模型飛行機のセットをいただき大喜びした。

母は中央銀行に職を得、一緒に靖国

街の社宅に住んだ。社員社宅は2階建て、二間長屋でオール電化、煮炊きは電気コンロ、よくニクロム線が焼き切れた。風呂はなく、暖房は石炭だった。当時としては珍しかった。支店長宅はそれは豪華、大広間の食堂の周辺にはガラスの食器がずらりと並んでいた。一人娘の部屋は床暖房だった。

45年8月に入ると、周りが慌ただしくなった。総動員で部長以下数名の職員が軍刀を手に出征していった。9日になると、ソ連の落下傘部隊がハルピン飛行場に降下するとのうわさが流れ、近所だったので防空壕の中で震え、緊張して潜んでいた。夏草のむっとするにおいが今も思い出される。

2. 敗戦そして中国残留（留用）

45年8月15日昼、天皇の詔勅を中央銀行ハルピン支店の独身寮で聞いた。受信状態が悪く、ガーガー音は聞こえなかった。話の内容はほとんどわからなかった。夕方になり日本が負けたらしいと風評が立った。寮内の中国人職員の態度が変わったのと考えあわせ、ただな

らぬことを察知した。翌日、昨日までへこへこしていた中国青年に胸を突かれ、やりかえそうとしたが母に制止された。負けたことを実感した。神国日本が負けた？ 事態が信じられなかったが、助かったという安堵感もあった。副支店長の非常時を想定した食料の備蓄があったので、食べることはできた。数日後には前の道をソ連兵に連行される日本兵の行列が続いた。中には柵の間から、手に札束を握り、食べるものを買ってくれと頼まれた。門番小屋のそばの売店に飛び込み、食べられそうなものを買ひ占め提供した。哀れだった。あの屈強な日本の兵隊さんがこんなことになるのか？ 然り、私も後日似たような経験をした。戦争に負けると、こんな目に合うのだと実感した。敗戦は非情！ 後日義父になる三井氏は、混乱の中、病身の妻を亡くした。4人の子どもがいたが、末娘は未熟児だった。親友の苦境を見かねた伯父は、母に面倒を見てやるよう懇願した。

日本帰国が始まった8月には沙曼屯の旧満鉄社宅に住んでいた。帰国のた

め身辺を整理し、それぞれリュック一つにまとめた出発当日の朝。当局の幹部が現れ、三井氏に帰国しないで残ってほしいといと要請、説得されたそうである。曰く、中国は戦後鉄道復興のため技術者が要だ。貴君の部下の技術者を説得中だが、貴君が残るのなら残ってもよいと言っている。よってぜひ貴君に残ってもらいたい。三井氏は元ハルピン工務区長、敗戦時は満鉄青年学校の教頭で、多くの部下、教え子を抱えていた。部下の中には、足を切断した母を抱え帰るに帰れないMさんもいた。進退窮まり留用を受託したとのこと（自分の未熟児のこともあったかもしれない）。結果母は残らざる得ない羽目になり、私も母一人を残すことができず、妹2人を伯父に託し残留することにした。

一方、小荒井八十六さんは東北鉄路管理総局長陳雲（將軍）から留用命令書を受け取った。沙曼屯（満鉄社宅）の区長（日本人）からも通達命令により留用者に決定された通知書を渡された。小荒井さんも5人の子どもを抱える身であった。

辛かったのは、ハルピン駅の倉庫掃除の使役に青年留用者（機関車運転手とかま焚き）と一緒に駆り出された時。駅のホームにたむろする帰国日本人、ホーム横のトイレはこちらからは丸見え、大事なものを投げ捨てる人もいた。貨車に鈴なりに詰め込まれ南下していった。悔し涙を流し、身の不運を恨んだ。それから、「残留日誌」に恨み・辛みをぶつけ、鬱憤晴らしをするようになった。留用後の任地は林口（鉄路交通の要衝）。職員の好意で中学補習の寺小屋が開かれた。教師は日技師（北海道大、英語・物理）、蓬田技師（旧制工業専門学校、数学）、N教師（国語）である。生徒は橋村以下4人。ハーモニカも小荒井さんに教えてもらった。マチ箱ラベル収集家から朝鮮学校に入ることを勧められたが、その気にはなれず、また義父に経済負担をかけられる身ではなかった。逆に、マチ箱収集を自慢する人物を軽蔑した。時間を持って余し、昼間屋根に干した布団に寝そべって、文学全集・探偵小説などを読んで、自習する気は、まだ起こらなかったが、

数学・物理に興味を持った。

次の任地は牡丹江。かつて著名な軍都で、敗戦後ソ連軍との戦跡が残っており、宿舎など周りの日本軍官舎の窓枠は全てなくなっていた。忠霊塔そばの山下將軍の官舎の応接間には棺桶が置いてあり、洗面所とおぼしきところのジュラルミンが残っていたのには感心した。要塞だった人工山は陥没しており、入り口は立派に舗装されていたが、数メートル先は陥没しており、怖くて入れなかった。山頂とおぼしきところの鈴蘭の花が印象に残った。ここでも職員有志が夜学を開いてくれた。教師はその道の専門家、最も興味があったのは機関車。昼間は機関車に乗せてもらい、お礼に清掃（機関車磨き）を手伝った。程なく政治学習が始まり夜学は自然消滅した。郊外に駐屯していた航空隊（林部隊）と野球の試合など交流が始まった。腕っ節の太い屈強な雄姿を見て憧れた。

第四軍靴廠

暇を持て余し、紡績工場（旧中学校跡、大連より機械を搬送）で働いた。長旅の錆を煉瓦で擦り落とす作業から

始まり、製糸機のメンテナンスを担当した。初めて給料をもらい、時間中にトイレに行ってもいいのかと訝しく思った。

次に、第四軍靴廠に入った。八路軍の兵隊さんが履く布靴を縫う麻縄を作った。靴底を縫うための麻縄と、周辺を縫う細い麻縄と2種類あった。機械を回転させて縋っていくのだが、足踏み速度と、撚りの強さが合わないので機械を改造することにした。日曜日家に帰った時、木の板から大きい丸いプリー（滑車）を糸鋸で切り出し、溝は焼いた火箸を当てて掘った。小径の金属製プリーと交換したところ、綺麗な撚りになり、生産量が2倍になった。請負制だったので給与も2倍になりホクホク、苦労が報われた。おまけに日本人で初めて労働模範に選ばれ、8人テーブルの宴席に呼ばれた。15皿以上、出たように思うが初めにがつがつ食べ、後半のご馳走を食べ残したのが悔しかった。中華料理の食べ方のマナーを学んだ。

ある日突然、政治幹事から帰国の話を告げられた。残留日本人全員が対象だという。即、帰宅し母に事情を話し、

一足先に帰国することを懇願、水杯を交わして別れ牡丹江を発った。T君（少年隊、天水会）は途中、ハルピンで降り家族に合流した。新京（長春）に一泊。驚いたことに街路樹の樹皮が背の高さまでぎ取られていた。聞くところでは、籠城中に食糧として食べたそうである。チャーズのご苦労が偲ばれた。終着、奉天（瀋陽）の駅前広場は広く、高い記念塔の上にソ連の戦車が乗っかっていたのが記憶に残る。街中で散髪をしたら、饅で整髪してくれたのには吃驚した（饅は女性のものとして理解していた）。数日後、全員会場に集められ、趙安博主任（東北人民政府外事局日僑管理委員会）の講話があった。曰く「都合で帰国できなくなった」、啞然とした！

補足説明があったが聞く耳はなかった。最後に、「それぞれ、身の振り方を考えるように」と、男子青年には「米の飯が食べられる」鶴崗炭鉱の紹介、提案があった。今更おめおめと牡丹江の母の下へは戻れない。一考の上、鶴崗炭鉱行きを志願した。最大の魅力は「米の飯が食べられる」ことにあった。先

輩の少年隊M隊長・指導員に危険性を理由に、翻意を促されたが、好意を謝し、自身の立場を説明し遠慮した。

鶴岡炭鉱

勇躍、鶴岡炭鉱に旅立った。青年隊の大部分の人が同行した。特に内河季司先輩は心強く、鶴岡炭鉱でも東山に配属され、隣同士に寝た。勤務は3組昼夜交代、私は旧陸軍下士官S氏が組長の15人メンバーの一員に、内河先輩は開拓団出身A氏の組に配属になった。入坑3日目、新人教育の作業中に青天霹靂の事故に遭った。17歳の時、旧坑道内で大きな石を、二人で抱えて移動中、突如相手が手を離してしまった。全荷重が私にかかり、耐えかねて石を落としたが、咄嗟に引っ込めた左手に異常を感じた。手袋をとると、人差し指の爪がなく、骨が露出していた。不思議なことに痛みはあまり感じない。訓練リーダーの元上等兵が、タオルを裂き止血。左腕を頭上に挙げたまま、車で興山にある病院に運ばれた。坑道にはガスがあるので放置すると傷口から腐るからと、すぐ手術が始まった。医師

は元軍医と聞いた。看護婦は普通のお嬢さん。第一関節から先を切り落とすべく、鋸でごしごし切る音が聞こえたが、痛みはあまり感じない。麻酔を打たれた記憶がない。人間は極端に大きな衝撃を受けると、あの敏感な指先の痛みを脳が感じなくなるようだ。二人の看護婦が「可哀そうに…」と泣いていた。

様子は、顔にかぶせられたハンカチの間からよく見えた。この時、思ったのは「パートナーは選べ」である。一声発してくれば、怪我はしなくて済んだのに…。

1か月後、職場に復帰した。人の嫌がる発破係を買って出た。鶴岡炭鉱は斜坑で、下から順番に発破の導火線に火をつけていき、急いでもとに戻る。もたもたしていると、最初の発破が爆発する危険な作業である。実際、事故に遭った人がいて、全身に石炭の破片が刺さっていた。顔はもちろん痘痕の様、眼も見えない。よく庭でハーモニカを吹いていたが、悲しいメロディー（故郷）が耳元に残った。炭鉱夫は第一級の労働者で、尊敬され給与も高かった。

手を怪我した情報は母に漏れた。忽々、

母は一人で250km余の鉄道に乗り迎えにきた。中国語は全くわからないのに、よくきたと思う。嬉しかった。別れは辛く、駅まで送ることができず、近くの丘の上から見送った。涙が頬を伝って続々流れた。これを見られたくなかったので、改札口まで見送れなかったのだ。親不孝を詫びた。数日後、幹部に呼び出され牡丹江に帰るよう指示された。母は見舞いではなく、貰い下げに来たのだった。鶴岡炭鉱、最大の収穫は「太陽の下でなら何でもできる」で、人生の指針と自信を得た。

南下命令、新任地天水

牡丹江に帰って間もなく、当局から南下せよとの命令があった。不思議なことに鉄道関係者だけ、携帯物の制限がなく、重病人も一緒だった。牡丹江からハルビン、新京（長春）を経て南下し、天津に到着した。天津は港町だ。日本に帰れるかもしれないと帰国運動が始まったが、夢破れ新任地は甘肅省の天水と告げられた。天津から3日間、荒野を走る列車に揺られ西安に到着。夜眼にも城壁の厚さに圧倒された。翌

朝、西安を発ち宝鸡に到着。この先は試験線とのことで、貨車に乗り換え、さらに西行した。途中、脱線し両側が崖、九死に一生の決死行だったが、天水に到着。目的は天水から蘭州まで354kmの鉄道建設だった。待遇は各段によくなり、私も5年ぶりに復学できた。嬉しかった。天水鉄路子弟中学校は、鉄道職員の子どもが通う学校だったので、義父の姓の三井武司と名乗った。中国語は全くわからないので、初級中学2年に編入し、猛勉強して半年後高級中学（高校）に飛び級した。全寮制で中国の学生と一緒に寝起きたので中国語は格段に進歩した。一緒に入校した日本人は20名、高校生は3人だった。校長の配慮か、生徒会の文芸幹事、そして学習幹事に任じられた。同級の林君（絵）と私（字）の壁新聞は好評であった。めきめき語彙が増え、

字形も綺麗になった。この私を見て「日本人とはこんなものか」と評されるのを意識し緊張の連続であった。写真の険しい顔立ちを見てほしい。理科系はもちろん、歴史や政治、国語も合格点をもらった。作文は筆で書いた。

帰国

53年春、蘭州で冬休みを堪能していたところ、突然帰国の話が舞い込んだ。当局のアドバイス：①政治に関する書籍、②集合写真、③自筆のノートは、日本で差しさわりがあるかもしれないので、持ち帰らないほうがよい。皆にも通訳し話した。数学教師でクラス担任の呉老師は、記念に数学のハンドブックを下さった。王書荊老師との別れは辛かった。涙ながらの言葉「日本に帰っても、中日友好に尽くすのだよ」は心に沁みた。蘭州を発ち、天水駅で盛大な歡送を受けた。

上海の宿は、ガーデンブリッジそばの学校寮風2階建ての建物だった。憧れの上海、第一百貨店でバックグラウンドの音楽を聴きながら、エスカレーターで上階に行くと大きな綺麗な壺を

売っていた。ハイカラだなと思った。ハーフコートの皮ジャンをセミオーダーで50万円、革靴25万円を記念に買った。

3. ああ、わが祖国

3月21日、上海を発った。通関はフリーパス。残留日誌を焼き捨てたのが悔やまれる。裏日本の松江らしきところの松並木を眺めた時、やっと日本に帰れたとの実感が湧いた。23日夕刻、舞鶴港に着いた。24日、はしけで浮き棧橋に上陸、祖国の土を踏んだ。宿舎は兵舎風の広い建物だった。26日夜、祖父が昇り旗を立て、老軀を押し、佐賀から迎えにきた。心意気に感動した。伯父を頼り、義父ともども長崎市に帰った。妹二人と再会を果たし、高校2年生からやり直した。英語は苦しんだ。模範生で卒業できたが、国立大学の壁は高く、見事に振り落とされた。

また義父はアカ呼ばわりされ就職口はなかった。苦慮の末、進路を求め上京した。遠縁のついでで中央大学図書館に臨時職員の職を得、ご配慮で工学部図書館に移り、翌年同敷地内の工学部電



天水鉄中時代の私と母



唯一持ち帰れた自筆の赤い手帳

気工学科を受験し進学した。昼間学校、夜図書館勤務を4年間続け、12時前に寝たことはなかった。

就職はシチズン時計(株)に挑戦した。世間相場1万3600円/月の時代、1万9200円/月が最大の魅力。機械腕時計から電子腕時計の研究開発で世界初名乗りを目指し、寝食を忘れ働いたが僅差で銀メダルに終わった。世界中の人々に水晶腕時計を使っていた。ただ感謝している。その後、(株)アマダでレーザー加工機の基礎研究に携わることで技術者冥利に尽きる。また1995年から2年間、清華大学精儀系

センサ研究室にJODC(海外貿易交流協会、通産省補助)の専門家として派遣され研究・開発のお手伝いをした。

4. 天水会

1954年5月25日、創立第1回集會を東京の新宿御苑で盛大に開催した。晴天に恵まれ、参加者86名、世話人は北川信一、上原善一郎、南谷幸典であった。天水会は会員の親睦を趣旨とする

もので、会則もなければ、会費もない。有志のカンパにより運営されるユニークな団体である。中国での苦節を経て、懐かしの祖国に帰国したのに世間の目は厳しかった。「アカ」呼ばわりされ就職はままならず、生活の基盤を築くのは容易ではなかった。周りに心配りをした船出であった。第3回集會を1958年5月25日に、新宿御苑で開催した。参加者は96名と、その輪を広げた。そして8月10日には『天水会報』第1号を創刊した。編集者は南谷幸典、ガリ版刷りB5版4ページ、後に伊藤礼子にバトンタッチした。今は木村達也顧問が担当している。編集方針は

「会員の状況・情報交換に重きを置き、広告はとらない」である。私のところには『天水会報』は創刊から現在まで全てそろっている。会報への情熱は、二世に引き継がれ発行を今も継続している。また、『天水会報』は「天水デジタルアーカイブプロジェクト」(木村達也顧問)により、電子化され『天水会小史』(絶版)ともどもCDに収録されている。

天水中日友好桜花園

1999年10月、天水中日友好桜花園を開園した。天水会の会員は天蘭線建設に協力し、完成させたことに誇りを持っている。また、天水市民との友情は深まり、天水は第二の故郷になった。ぜひ実績を残したいと念願し会員は立ち上がった。記念碑の碑文は推敲に推敲を重ねた南谷老の労作である。天蘭線完成の事績は、日中友好交流のはしりでありシンボルだと自負している。その後日中の交流は、工事に携わった同僚、同志のみならず、当時学生であった二世に引き継がれ、天水会70年の歴史を刻んでいる。

南谷老は2003年8月15日、亡くなられた。享年94歳。老の足跡については、拙文「南谷老を悼む」新ランドブリッジを天国に伸ばす」(会報2003年)を参照。天水に対する思い入れは人一倍強く、天水中日友好桜花園の完成式には、老軀を押し参加された。その熱意、面目躍如であった。「新中国建国間もない時期に日本人技術者たちが中国の技術者・工人に協力して天蘭線を建設した実績を中国の人々にも知ってもらいたい」が口癖だった。南谷老の魂は、今も第二の故郷天水にある。その想いは達せられ、天水中日友好桜花園は、天水市民の憩いの場になり、記念碑の前では太極拳が舞われ、東屋は談笑の場になっている。そして、市政府の指針「天水を花の街に」で、藉河河畔は数キロにわたる桜並木になっている。これを受け、天水会は2つの活動プロジェクトを立ち上げ、最終の活動の締めを計画している。「天水鉄道博物館展示プロジェクト」と「天水さくら(桜花)プロジェクト」はぜひ完成させたい。皆様のご支援、ご鞭撻をお願いしたい。

5. まとめ

(1) 中国は育ての親、中国は第二の故郷。最大の成果：「太陽の下でなら何でもできる」の人生の指針と自信を得た。歴史は「炭鉱のカナリヤ」という意味が体験を通して理解できた。

(2) 新中国の建設を支援する機会を得た。国共内戦、人民解放戦争を後方で支援した。天蘭線建設に同行し、念願の学生生活ができた。

(3) 日中草の根活動は生涯を通しての生き甲斐になった。天水会の70年にわたる活動、同学たちとの親交が続いて

いる。成し得たことはわずかもかもしれないが、これからも活動を継続したい。(4) 水晶時計の研究・開発・販売、またレーザー加工機の基礎研究に立ち会えた。

技術者冥利に尽きる。

(2023年3月30日・公開講演会)

筆者略歴(はしむら たけし)

長崎県対馬出身。10歳で渡満、1953年帰国。中央大学工学部電気工学科を卒業後、シチズン時計(株)に入社。水晶時計、事務機器、健康機器の研究・開発を歴任。その後、(株)アマダに入社。レーザー加工機およびロボットの研究・開発、中国進出計画に参加。1995～97年、JODC専門家(通産省補助)、清華大学精密系でセンサ技術指導。国内では特許流通アソシエイト(公益財団法人発明協会)、地域産業振興を促進。2000年から10年間、北京市八達嶺鎮で防風固沙の植林活動。1998年から科学技術者フォーラム理事。現在、天水会会長、龍騰グループ代表。



天水中日友好桜花園

淑子、澄子、嵐子、そして満洲

『タンゴタンゴタンゴ』を上梓して思い出す日々

大類善啓（会員）

未だ知られざる方正日本人公墓

「方正」については少しばかり本誌に書いたことはあるが、お読みでない方もいるだろうと思い、改めて簡単に記しておこう。

方正とはハルピン市から東へ一八〇kmのところの位置し、黒竜江省にある。旧満洲にいた「開拓民」たちは同じ黒竜江省にある宝清（ほうせい）県と区別するために、ここを「ほうまさ」と呼んだ。

一九四五年八月九日のソ連参戦、そ

れに続く日本の敗戦で、たちまち日本人たちと中国人たちの立場は逆転した。中国の農民たちは、土地を奪われた怒りから「開拓民」たちを襲撃した。

「開拓民」たちはソ連軍と中国人たちの攻撃に逃げまどい、人々は「方正には関東軍がいる。食糧の補給基地がある」と方正を目指した。逃げるために団の幹部から、泣き叫ぶ子どもは殺せと言われ、自分の子どもを扼殺することもあり、時に集団自殺した「開拓団」もあったがなんとか方正に辿り着いた。しかし、すでに関東軍は南方に移った後だった。

日本政府から棄民された人々は酷寒の方正の地で、飢餓と発疹チフス、凍死などで五千人近い人々が亡くなった。その日本人たちの公墓が周恩来総理の認可の下に、一九六三年建立された。

私が二〇〇五年、仲間たちと「方正友好交流の会」（以下、「方正の会」）を立ち上げて責任者を引き受けたのは、未だに知る人々が少ない日本人公墓の存在を多くの日本人に知ってもらい、当時の周恩来総理らの国際主義的な精神を少しでも広めたいという思いからだった。しかし今や、国際主義という言葉は、『人民日報』などの中国メデイ

アから消えて久しい。

公墓の存在に驚いた山口淑子

さて、「方正の会」創立総会の取材に來た読売新聞記者がすぐに、夕刊の社会面に大きく公墓に関する記事を書いてくれた。すると、その夕刊の記事を見た山口と名乗る女性から電話が入った。その日の夕方五時ごろだったか、私がまだその記事を見る前だった。女性はまだその記事を見る前だった。女性はまだ自宅に届いた夕刊の記事を読んですぐ、連絡先として記してあった私に電話をかけてきた。彼女は、「満洲で生まれ育った私も日本人公墓のことは知りませんでした」と言った。声の主は山口淑子（以下、登場するすべての人たちの敬称は略しました）だった。

彼女が「私に何かできることはないでしょうか」と言う。心臓も強くなっただけなら（笑）、「創立したばかりで会には金がないので、百万円ほど寄付してくれないか」と言ったかもしれないが、奥ゆかしくも（笑）私は、近々会報の創刊号を送るので見てほしいと言った。会報には郵便振替口座番号は記してある。しかし会報を送っても彼女からは、梨のつぶてだった。

その後、何回か彼女に電話をしたが、いつも「あの時、関東軍は逃げてしまったんですよね」と同じ言葉を繰り返すばかりだった。たまたま、ある会合で彼女に出会い名刺を交換したが、とりわけ彼女は方正について話すわけでもなく、言葉も交わさずにただ無言で足早に立ち去った。正直に言えば、「なんだ、山口淑子という女は?!」という思いだった。

満鉄勤務の父を持つ編集者の知人は山口淑子について書いた時、彼女に確認のために原稿を見せると、「ここはどういう意味合いで貴方は書いたのか」などと、彼を厳しく叱責するかのよう

な言葉を淑子から浴びせられたことを私に話し、その時の山口への怒りが未だに収まらないかのように、「彼女は気まぐれなんですよ」と吐き捨てるかのように山口を一蹴した。

そんなこともあり、満映に中国人女優として生きた彼女のその「反省」も疑ったが、矢吹晋や当時の満洲にいた信頼できる人たちからは、「結果的に中国侵略に加担してしまったが、淑子の反省は本物である」と聞いた。しかし、彼女に対する私の印象は、ささやかな私の体験からいえば今でも良くはない。

ついでに記せば、一九七一年だったか、かつて「満洲国」の高級官吏をしていた武藤富男に取材で会った時、『満洲国の断面——甘粕正彦の生涯』という当時すでに絶版になっていた著書を贈呈してくれた彼は淑子を、ここでは憚れるような言葉で淑子の「実像」を語り、彼女を批判した。一般の人々が受け止めるような淑子ではない。まるで正反対の淑子像だった。

評価分かれる淑子像

しかし淑子を否定的に言わず、私が親しくしている長谷川捷一、悠紀子夫妻のように淑子を評価する人もいる。捷一はアラビア石油に勤務していた一九九〇年八月、イラクのフセイン政権によって多くの日本人や欧米人とともに虜囚の身になった。

当時のイギリス首相・サッチャーの「女・子どもまで人質にするとは何事か!」という批判に、フセインはいち早く女性と子どもたちを解放した。悠紀子は残る夫たちを釈放すべく、仲間の夫人たちともに会を組織し国会議員たちに働きかけた。

悠紀子は議員会館に向き、次々にアポイントを取って国会議員に会った。革新系議員は頼りにならなかつたが、淑子に電話をすると「すぐいらしてください」と言われ、親身になってくれた。

フセイン政権は、クウェート人と結婚していた日本女性と子どもたちは「日本へ帰れ」という。しかし二十人ほどいた残留婦人は危険な状態でなか

なか帰れないという。カナダ大使館はBOACを飛ばそうと言ってくれたが

一方、イギリスの日本大使館は「帰国費用は貸すから帰国するまでに返してくれ」と思いやりのないことを言う。

最終的にJALとANAに分乗して日本に帰ってきたが、彼女たちに二百万円ほどの飛行機代の請求がきた。その中の一人がどうしたものかと、悠紀子に電話をしてきた。悠紀子はすぐに淑子に電話をして会った。淑子は悠紀子に言った。「お金はお支払いにならないで。私が必要としますから。でも私がやったとはおっしゃらないでね」と言うのだった。ともあれ、払わずにすんだのである。

悠紀子は、捷一たちを解放するに当たって活躍したアントニオ猪木と淑子の二人が、今でも頼もしい人間として印象に残っている。一九二〇年生まれの淑子は当時、七十歳ごろである。私が淑子とほんの少しばかり関わりを持った時は、八五歳ごろである。亡くなる九年ほど前であるが、すでに呆けているのであろうか。

方正の記録映画を創った羽田澄子

「方正の会」は創立以来、今でも年二回、会報『星火方正』を発行している。近年、それなりに評価され、昨年一二月に発行した会報は一五〇頁ほどになる厚さである。

数年前に会報を『週刊金曜日』に送ったところ、当時の編集長・小林和子（二〇二一年一月に編集長を勇退）から、「この充実した会報が会費とカンパでできているなんて驚きです」という手書きで書かれた書簡をいただき、嬉しくなった。本会の会員諸氏の中にも支援していただいている方もあり、改めてこの場を借りて感謝の言葉を述べたい。ありがとうございます。

さて、映画作家に羽田澄子という女性がいる。主に記録映画を創っていた彼女に、創刊号から『星火方正』を送っていたが、彼女にはいろいろなお知らせから本や資料が送られていたのだろう。私が送った会報を読むこともなく机の前に置いたままだったが、ある日、封

を切って驚いた。

大連生まれ、その後も大連や旅順で育った彼女も初めて、方正日本人公墓の存在を知ったのである。公墓のことを知った彼女はすぐに電話をかけてきた。「驚きました。どうして被害を受けた国が加害者たちの墓を建てたのか。一度、方正を訪ねたい」と言うのだ。

二〇〇八年、私たちの仲間が方正への墓参のツアーを企画していることを話すと、彼女はカメラマンを同行して方正を訪れた。それは二〇〇八年『嗚呼 満蒙開拓団』という映画に結実し、二〇〇八年キネマ旬報と日本映画ペンクラブの文化映画ベスト一位に輝いている。そして、二〇〇九年六月中旬から二か月半、岩波ホールで上映されて評判を呼び、その後、各地の市民運動の担い手たちによって全国的に上映された。

映画『嗚呼 満蒙開拓団』の冒頭、満洲の大地を方正へ行く映像のバックには、「私は、『星火方正』という不思議な雑誌で初めて日本人公墓を知りました」と澄子自身が語るナレーション

が入り、画面には『星火方正』の創刊号と二号の表紙写真が映し出されていた。エンドロールの〈協力〉の文字の後は、方正友好交流会の会、そして私の名前も流れた。映画のラストシーンで自分の名前が出たのは後にも先にも初めてのことだった。

楽しかった大連、旅順の日々

二〇〇九年のその年、『星火方正』に掲載すべく澄子にインタビューしたが、当時でも彼女は大連、そしてとりわけ旅順を懐かしんだ。彼女は、旅順港から徐々に高くなる斜面の坂の上にある赤煉瓦の二階建てに住んでいた。それは、当時の日本の庶民の家の外貌ではない。

街はアカシアの緑に埋もれて見え、波打つような緑の中に、石造りや赤煉瓦や、白やクリーム色の壁のロシア風の建物が点在している。「こんな美しい街に住んでいるのだ」と、澄子は息をのむ思いで、つくづく街を眺めたという。そしてその瞬間、「この風景を

一生忘れないだろうな」と澄子は思ったのである。

「全体に旅順はこせこせしていないんですよね。街自体も日本のように木造建築ではなくて帝政ロシア時代の建物ですから、道は車道と歩道できていて、並木があり、まったく雰囲気違って、のんびりしていて……」
と当時の楽しい日々を語るのだった。

「開拓民」たちは日本の敗戦と同時に地獄のような境遇に突き落とされたが、澄子は違った。日本が敗戦になった時、彼女は「これで戦争は終わった、死ぬことはないのだ」と思い、喜んだ。彼女は、かつてニューヨークに住んでいた叔母からもらったピンクの花模様のワンピースと紺のスエードのサンダルを取りだして家を飛び出すと、近くの公園の大きな池のほとりでワンピースの裾をひるがえして街を一回りした。戦争中は、やはりスカートははけなかったのだ。当時、澄子は十九歳だった。日本の敗戦を聞いて、大連実業高校の校長をしていた澄子の父親は「俺は日本に帰る」と言い、すぐに帰国した。

澄子と妹、そして母親ら女たちは、そんな父親を見送り、旅順に残った。しかし翌年、母親と妹は日本に帰国した。「私は残るわ」と澄子は旅順に残った。彼女はそれほど旅順を気に入っていたのだ。しかし、だんだんと日本人は引き揚げてしまい、ほとんどいなくなった。当然だが、日本語も周りから聞かえてこない。澄子も日本へ引き揚げる潮時だと思い、一九四八年大連港から帰国した。

彼女は大連にいたとき、「開拓民」の弥栄村いよきむらの人たちが父の実業学校に収容されていたとき、仲間ともに食事作りなどで支援したが、彼女自身は悲惨な体験とは無縁であり、澄子にとって大連、旅順は故郷であり、とりわけ旅順は懐かしく大好きな街なのである。

美智子皇后と満洲

その後、澄子は私に「美智子さんに『嗚呼 満蒙開拓団』を見てほしい。大類さん、なんとかなりませんか」と言うのだった。美智子さんとは当時の皇

后である。なんでも澄子が監督した記録映画『歌舞伎役者 仁左衛門』を、美智子はお友だちと共に見にきてくれたことがあったという。そういうご縁があるなら、澄子自身がDVDを贈ればいいのではないか、と言ったが彼女は、「私からはどうも……大類さん、なんとかなりませんか」と言う。

そこである人のことが頭に浮かんだ。仮にKさんとしておこう。Kに話すと、「では私が美智子さんにお送りしましょう」と言う。特別に作ってもらったDVDと美智子宛ての手紙を私は書き、Kに送った。

それから一か月後ほどだったろうか。Kから電話が入った。「大類さん、昨日、天皇后陛下にお会いしました」と言い、美智子は私の手紙を机の前においてKに、「重いテーマの映画を見ました。ありがとう」という言葉をかけた、という報告を受けた。

そして二週間ほど経ったころだろうか。美智子が「残留され帰国された人たちに私たちが何かできることはないでしょうか」とご下問されたと言うの

だ。そう言われた役人は驚き、「なぜ今、残留婦人なのか」と疑問を持ち、Kに問い合わせた。Kが澄子の映画を見たからだろうと言うと、ご下問を受けた彼はすぐ納得したという。

しかし翌年の二〇一一年三月一日の東日本大震災で、被災者への慰問に追われた美智子たちはそれ故、その希望は後回しにならざるを得なかった。しかし、それは二〇一七年の満蒙開拓平和記念館訪問につながった。

その訪問翌日の全国紙は、扱いは小さかったが現地地の『信濃毎日新聞』は、一面から社会面までほぼ全紙面というほど大きく両陛下の記念館訪問を報道した。案内をした寺沢秀文（現館長）によれば、方正日本人公墓の写真を前に美智子は、「これがあの公墓ですね」と語ったという。美智子は残留婦人への思いを忘れてはいなかったのである。

藤沢嵐子にとって満洲とは……

この二月、『タンゴ タンゴ タンゴ』（批評社）というタイトルの本



を上梓した。サブタイトルは、「情感 Sentimiento 織りなす魂のしらべ」である。

日本タンゴ・アカデミーという会があり、そこで出している機関誌や、『ダンスファン』に掲載されたカルロス・ガビートという今は亡きタンゴダンサーヘインタビューした原稿、また『東京新聞』に掲載されたタンゴエッセイなど、タンゴ関連の原稿がそれなりに溜まり、なんとか本にならないかと思った。

前著『エスペラント 分断された世界を繋ぐ Homaralismo』（批評社）を二〇二一年五月に刊行して一段落し

た後、編集者に話したところ、「読んでみましょう」と言ってくれ、本にしようと言ってくれた。

拙著には、一章を割いて藤沢嵐子の「大連体験」に焦点を当て、彼女の内面について書いた文章を収めているが、改めて嵐子の大連体験を思い起こし、山口淑子や羽田澄子の満洲との関わりの違いを思うのである。

タンゴ歌手として年末恒例の紅白歌合戦に五回出演するなど、大衆的にも人気があった藤沢嵐子は、二〇一三年亡くなった。それを追悼する意味を込めて書いた原稿のタイトルは、「嵐子よ、安らかに眠れ《大連体験》を昇華した藤沢嵐子のタンゴに思う」である。

「大連のことは口にするのも嫌！」

嵐子の父は、満洲瓦房店がぼうてんにある会社の工場の庶務課に勤めていた。単身赴任である。瓦房店は大連から北東一〇〇kmほどのところにある。当時、嵐子

は上野にある東京音楽学校（現東京藝術大学）に在学していたが、父は家族もみんな瓦房店に移ってこいという。

一九四四年の東京は「ひどい状態だった。戦争が進んで爆撃はひどくなる。私は食べものの欠乏よりも、石鹼とかチリ紙とか日用品のないのがものすごくいやだった。なんだか体がベトベトして気持ち悪くて」と嵐子は書いている（藤沢嵐子著『カンタンドー——タンゴと嵐子と真平と』六興出版、一九八七年）。

父は嵐子に、学校は休学すればいい、満洲でもハルピンに出ればロシア人のいい音楽教師がいる。戦争が終われば、また帰って東京で勉強を続ければいい。せいぜい二年のことだと言う。「戦争に勝つと思っていたのだ！ みんな」と嵐子は書いている。

嵐子はそうして学校を中退して、母と末の弟と共に瓦房店に渡った。東京駅から姫路へ、そして乗り換えて下関へ、そこから船で満洲へ。

瓦房店に着いたのは、一九四五年度の元旦だった。ニラの匂いがただよう街

に、嵐子の母は怒った。嵐子は書いてある。「満州——ニラの匂い。母はすぐ父とけんかをはじめた。『どうして、こんな臭い、不潔なところへ連れてきたの!』」。

戦争は日本の敗北で終わった。瓦房店の工場は接収され、父は失職した。嵐子は大連のダンスホールや音楽喫茶で歌い、父に代わって家族を養ったのだ。

前述の嵐子の著作には、上記のように大連でのことを少しばかり書いているが、しかし現実には、大連のことは周りの親しい人にも語らなかった。

私が日本タンゴ・アカデミーの機関誌二〇一四年春号に書くために取材した当時、嵐子のそばにいたギターリストの河内敏昭や、付き人のように寄り添っていた河内夫人にも決して大連のことは語らなかったという。

今は亡き蟹江丈夫（タンゴ解説者）はかつて私に、嵐子に何度も大連のことを聞こうとしたが、「もう大連のこととは思いついたくもない」と言ってお口を閉ざしたという。蟹江は「それだけ

大連のことは思い出すのも嫌だったんでしようね」と私に語ったことがあった。

嵐子との短い会話

一九七一年だったか、私は一度だけ嵐子と短い会話を交わしたことがあった。

六八年の夏から半年ほどのヨーロッパでの滞在中で、ナシヨナリズムなどについて自らの問題として受け止めていた私は嵐子に、「タンゴを歌うということに疑問を持った事はないか」と聞いた。

東ベルリンのベルリーナ・アンサンブルでブレヒトの芝居、西ベルリンでワグナーの楽劇やオペラなどを見るにつけ、日本人が欧州生まれの芝居や歌などを演じたり歌ったりすることに疑問を持つというか、本当のところどこまでヨーロッパ人のレベルまで達するのか大いに疑問を持っていた。しょせん、物まねの域を出ないのでないかと思っていたのである。

嵐子はそのような疑問を持つ私の質問に、「私も何度か悩み、聖書を読んだりしました」と語った。その当時、彼女はまだ洗礼を受けていなかったが、その後、彼女はキリスト教に入信した。

しばしば、「満洲帰りはさっぱりしている」と、満洲育ちの女性を妻にもつ友人が私に語ったことはあるが、嵐子は「未練たらしいことは本当に言わなかった」と前出の河内は私に語った。

後年、歌手を引退し新潟の長岡に引越したが、嵐子はきれいさっぱり、タンゴ関係者とはもとより、今まで付き合い合っていた人とも交際を絶ったという。

満洲と縁がある山口淑子、羽田澄子、藤沢嵐子という傑出した三人の女性と少しばかり縁があった私だが、彼女たちの人生における満洲について思うと、日本生まれ日本育ちの私にどれだけ彼女たちの内面に迫れるのだろうか、と噛みしめるのである。

陶々俳壇

陶陶句会
句会
結果
2022年12月

兼題 「冬至粥」「山」 馬場由紀子

立ち漕ぎに揺れる二つ編み冬夕焼け 松島二三四

◎正子 夕焼けに向かって高く高くブランコを漕いでいく少女のシルエットに惹かれました。

◎明良 一服の墨絵のような趣ある景色ですが、最近は櫓を操る若い女性は見かけなくなりました。

◎由紀子 この「立ち漕ぎ」は自転車だと思えます。なんだか懐かしい景ですね。キョんキョんします。

冬至粥土鍋の横の走り書き //

◎明良 長く使われた土鍋でしょうか、先人が残した記載が気になり粥を啜る姿が浮かび想像を募らせる句です。

◎由紀子 由緒ある土鍋なのか。銘品土鍋、お目にかかりたい。

煤払ひ玄関先の本の山 //

◎紅杓 私は煤払いだけでなく終活に向けた本の整理に奔走しています。

◎明良 シベリアに思ひをはせる冬至粥

瀬崎明良

◎紅杓 戦後ソ連に強制連行された方々の苦勞が偲べますが、体験談を伺いたいものです。

◎二三四 抑留に思いを馳せての慨嘆でしょうか。胸がつまります。

◎明良 映画『ラーゲリより愛を込めて』が上演中です。主人公の山本幡男さんが主催したアマール句会私の父も参加し、遺書を持って帰ってきました。反抗心の強い父は何度

も拘束牢に入れられたとの記録がソ連側に残っていました。嫌いなロシアですが国のマイナスになることもしっかり記録し遺族に伝える姿勢は素晴らしい姿勢です。

齢のみ祖父を越えたる冬至粥 //

◎二三四 肉親が亡くなった年齢よりいつの間にか自分のほうが長く生きている。というのは歳をとれば誰も抱く感慨です。作者にとつて祖父は特別な存在だったのでしょうか。その祖父への追慕と、祖父より長生きしていることへのしみじみした感慨と感謝が、冬至粥の味わいに通じるともつづ。

◎由紀子 「齢のみ」ということは他のことでは何も祖父を超えることができなかったのですね。どちらでも使えますが、この場合「越える」より「超える」かなあ？単に歳を超えるのではなく、裏にお祖父様の才能を超えることができなかつたという暗示を含めるとするとやっぱり「超える」でしょうか。偉大なお祖父様に乾杯！

山宿の酒席の締めは冬至粥 橋本紅杓

◎正堂 山仲間で昔から励行している登山忘年会。それも一年中で一番昼の短い冬至の日。早々に酒は打ち止めにし冬至粥をいただき解散したことだった。

◎善一 冬至粥をいただいたときに、ピタシン欠症にならぬようにと、奥さんが氣遣って南瓜スープを添えてくれた。うれしい句である。

ひね豆の仄かに揺れる冬至粥 日野正子

◎二三四 小豆を入れて炊く冬至粥。作者は古い豆を入れて炊いた。ちょっと古いけどちゃんと火が通るだろうか、でももったいないし。作者の想いに応えた小豆はちよっぴり照れくさそつに椀の中で見え隠れしている様子が浮か

びます。「ひね豆」が効いています。

◎紅杓

◎由紀子 ひね豆は美味しいのです、きつと。その風味をいただきます。人間たつて古い方が味があふてしよつ。

土に礼薩摩黄金の天火焼き //

◎由紀子 美味しそつ。「土に礼」に敬服。

畑帰り大根配る両隣 伊藤正堂

◎正子

◎由紀子 豊作だったのですね。

里芋の葉に銀の玉光りをり //

◎明良 広い里芋の葉は朝露が乗り玉となって陽光を多様な色で見せてくれます。こころ打つ世界を映している句でしょうか。

◎正子

父自慢根来の椀に冬至粥 大内善一

◎明良 タイに滞在したころ出張先の田舎で朝の粥を食べました。大きな木椀に入れた粥にアヒルの塩卵が入って美味しいものでした。高級な根来の椀でも食べて見たいものです。

今は亡き母を偲びて冬至粥 //

◎正堂

熱燗や徳利の歪み女体めく 馬場由紀子

◎善一 何とも不思議な句である。たぶん飲んだ酒に酔いがまわつてきて徳利がゆれて、それが女の方がたおやかにゆれているように見えてきた。そつまで飲まなくても！

◎明良 齢に負けない心がないと読めない句でしょうか。

◎正堂

枇杷咲くや富士より安房に寄する波 //

◎明良 枇杷の木、安房の浜辺から遠望する富士と見事な景色です。浜辺に寄せる波は心を安らかにしてくれます。詠み人の環境が羨ましい句です。

中国

ウオッチング



編・訳 上松玲子

葬送政策の立法化に期待

4月1日、貴州省貴陽市民生局と同市葬儀管理所の手配で9世帯の遺族が天津市に赴き海上葬儀に参加、4月7日、浙江省温州市の第7回連合海洋散骨会には150名が参加し故人の魂を海へ還すなど、今年の清明節前後には海洋葬儀が多く行われた。

近年、海洋散骨葬、樹木葬、ガーデニング型樹木葬、遺骨をダイヤモンドにして手元に置くなど広い土地を使わず、生態環境にも配慮した葬送方

法のニーズが増加、各地で奨励政策がとられ、現在全国で26の省でその実施に関する具体的指示が出されている。

法制化によって人々の後顧の憂いを払拭すること、および経済的に困難な人々の葬儀の負担軽減政策は葬送政策の安定的発展につながり、各地方で、進展が見られる。民政部社会事務司の朱玉軍副司長によれば全国31の省と新疆の生産建設兵団では困窮者に対する葬儀費用の減免や補助金などの基本政策が実施されており、今後は公益性の高い葬儀施設の建設と時代に合った経営に力を入れるという。

『法治日報』2023年4月18日

地下水の汲み上げすぎ

地下水の問題にはこれまで多くの都市が頭を痛めてきたが、先頃また13の都市が地下水の水位の著しい低下を水利部に指摘された。水利部水

資源管理司および監督司は先日開催された会議で、地下水の超過採取による政治的、環境的、経済的につけは莫大なものになると言及した。

地下水位低下には降水量の減少と用水量の増加の二つの要因がある。中国水科学院の教授級高級技師で博士課程指導講師の謝新民氏は、13都市について二つのタイプがあると指摘する。地表の水資源に恵まれない地域では、市民の生活用水や工業農業用水の確保のために大規模な地下水採取を行い、それが過剰採取につながることもある。しかし、地表の水資源に恵まれない地域から過剰採取をしている地域のケースは軽視できない。業界関係者の話では近年都市の水道会社では地表の水資源は高すぎると評価しているそうだ。設備投資が大きく、維持管理に人手もかかる。地下水の方が割安だというわけだ。

これでは地下水の水位は急速に下がる。さらに厄介なのは地下水の水位低下が深刻な地域の多くが食糧の主要生産地でもあるということだ。例えば河南省では地下水の水位も絶対目標値である一方、食糧生産量目標も必ず達成が求められるという制約がある。

『中国新聞週刊』2023年4月22日

珍しい姓の不便解消へ

雲南省麗江市永勝県のリス族には鳥を守り神とする「nia」という姓の一族がいる。漢字では上半分が「鳥」から連火を除いたもの、下半分は「甲」と書く。しかし、公安部門の情報システムでこの漢字を入力できないため、村人は多くの不便を被り、「鴨」に改姓せざるを得なかった。

中国の民法には姓名権の規定があり、自分の姓について法律により決定、使用、変更、他人に使用を許可する権利を

もつが、公序良俗をおかしてはならないとある。近年、名前にめったに使われない珍しい漢字が使われているために被る生活上の様々な不便を解決する努力が多くの行政部門でなされてきた。新たに登録された文字は1994年には6千字だったが現在は7万字に増え、公安部門の人口情報バンクの専用フォントバンクは拡大を続けている。少数民族の文字についても専門のバンクを設置して最大限問題解決にあたっている。

2016年公安部は国家民族事務委員会、教育部、工業情報化部など14の部や委員会と連合して「政府管理部門および公共サービス情報における姓名情報収集規範の統一に関する通知」を發布し、証明書を必要とする全部門でシステムの更新を急ぐように働きかけた。伝統文化を守る観点から、また個人の姓名権を尊

重する観点から各部門は努力を続ける必要がある。

『工人日報』2023年4月25日

自宅の庭で野菜栽培に警告

李さんは一戸建ての自宅の庭で野菜を栽培したことが規則違反だとして、団地の管理会社から警告を受けた。そこで謝罪動画を公開し野菜の苗を全て抜いたと述べた。ネットでは管理会社は口出ししすぎだという意見が多い。

しかし、問題は野菜を育てることの是非ではなく、居住地管理の問題だ。庭での野菜栽培の可否は住民同士で交わす約定による。家を買うときは管理会社と管理服務契約を結ぶ。所有者組合成立後は公共の利益に関わる行動規範などの規約にサインする。所有者はそれを守る義務がある。

この議論はベランダの使い方や、増改築と同様、度々問題になる点だ。私有財産なの

だから自分の勝手だと主張し規則を守らず、近隣の和を乱し、建物の安全を脅かすという誤った道を歩む所有者たちがいる。野菜栽培など小さいことと思うなかれ。公共意識の高さや規則を尊重する気持ちを反映するものなのである。

『浙江日報』2023年5月9日

屋台の煙復活か

山東省淄博市で立ち上った煙が、一線都市にも流れてきた。深圳市は今年9月1日から道端の露店を全面的に禁止する措置を撤廃することになった。北京、上海、蘭州などでも管理方法を見直した上で露店経営を認める政策を模索中である。実は、淄博市は2年前から露店経営の指導に着手。市経済開発区総合行政执法局は12の市民サービス区域、朝

市夜市設置区域を定め、規定区域内で営業する屋台からは水道電気代も含め費用徴収しないこととした。全面禁止の解除は全面自由化の意味ではない。北京、上海など一線都市では、商業地区における屋外営業について品目、区域、時間について明確な規定を設けている。屋外営業の解禁は、露店の林立を招き、街の景観を乱すのではという懸念に対し、北京市当局の責任者は屋外営業管理は市民の消費需要を満たすための措置であり、露店のためのもではないと表明した。立ち上る煙のにおいと、都市景観のバランスをどう保つか。管理が緩すぎれば混乱し、締めすぎれば存続できない。浙江大学の盤教授は、個別の事情を斟酌することなく規則で一刀両断というやり方が紛争を招くという。執行判断を市民に近い基層に、さらには店主や市民の自主管理に委ねることが必要だという。

『中国新聞ネット』2023年5月9日



◆第12回定時社員総会の概況報告 (5月25日開催)

現時点で詳細を述べることはできないが、主な概況は次の通りである。

2時半の定刻に事務局長が出席状況を報告した。会場への出席者は47名、書面出席が50名、委任状が2名、合計99名である。本年3月末の正会員は150名、過半数は76名、従って定款第18条に照らして有効に成立したことを報告した。

決議事項

- (1) 令和4年度事業報告(案)
 - (2) 令和4年度決算(案)
 - (3) 理事7名選任の件
 - (4) 監事2名選任の件
- 上記4件は原案通り可決した。

報告事項

- (1) 令和5年度事業計画
- (2) 令和5年度予算
- (3) 顧問・諮問会委員の改選
- (4) 将来検討委員会からの提言

上記4件について担当常務理事および会長より報告した。

総会終了後に、コロナ感染が小康状態になってきたこともあり、会場で会員懇親会を開催した。

(事務局長 竹前栄男)

同好会だより

〈一石会(囲碁)〉
 だいま休会中。新しい会員を募集中です。

〈俳句会〉

対面と、Zoomによるオンライン併用での俳句会を開催しています。

〈謡曲会〉

松木千俊先生のお稽古は一人ずつの個人指導です。ご興味のある方は、事務局までご連絡ください。

みんなの写真館

ニュージーランドの「シャンパン・プール」(表紙)

4月に訪れたニュージーランドの「シャンパン・プール」です。北島にある町、ロトルアのワイオタプ・サマル・ワンダーランドという観光スポットにあります。直径65m、深さは最大で62mの大きな天然温泉で、1か所の温泉湧出箇所のサイズとしてはニュージーランド最大の池です。

「シャンパン・プール」のほかにも、絵の具のパレットのようにさまざまな色の付いたアーティスト・パレットや、不思議な色のデビルズ・バスなど色とりどりの美しい温泉があります。

中でも「シャンパン・プール」はその珍しい色彩から特に人気が高いところです。この観光スポットには、先住民のマオリ族が住んでおり、園内のツアーガイドさんもマオリ族の方でした。

(姜晋如)

原爆ドーム(表4上)

G7広島サミットは広島市内のホテルで5月19～21日に開催されました。私は開催、1か月前に広島平和記念公園にある原爆ドームと広島平和記念資料館を訪れました。G7各国首脳が訪れることになっている資料館を見学しました。館内展示は被爆犠牲者の写真や遺品などが並び、被爆の恐ろしさを実感しました。

(村田嘉明)

瀬戸内海(表4下)

JR尾道駅に近い朱塗りの本堂がある山頂まで登り、眼下に広がる瀬戸内海、尾道水道、向島と本州に架かる新尾道大橋と尾道市街を撮りました。向島から因島大橋を渡ると因島です。真言宗千光寺は806年の開基。そこへの途中の「文学のこみち」には林芙美子、正岡子規、柳原白蓮らの石碑、志賀直哉旧居もありました。下山後、尾道市内で本場の「尾道ラーメン」で昼食をとりました。(村田嘉明)

2023年7月の行事予定

- 6日(木) 14:00 公開 第9回対面&オンライン講演会(対面とZoomのハイブリッド方式で実施)
「ボリビア開拓記外伝―疫病・災害・差別を生きぬいた人々、交流の促進と未来に向けて―」(仮題)
渡邊英樹氏(社団法人日本ボリビア協会相談役、ボリビア沖縄県人会名誉会員)
- 11日(火) 14:00 謡曲会(松木千俊先生お稽古)
- 12日(水) 13:00 俳句会(対面とZoomのハイブリッド方式で実施)
兼題「貰う」及び当季雑詠から5句を投句(6月末までに)
- 13日(木) 14:00 公開 第10回オンライン講演会(Zoomで実施)
「中城村の沖縄戦」
濱口寿夫氏(中城村護佐丸歴史資料図書館長)
- 18日(火) 16:30 公開 第11回対面&オンライン講演会(対面とZoomのハイブリッド方式で実施)
「『満洲国グランドホテル』を書き上げて」(仮題)
平山周吉氏(作家)
- 27日(木) 14:00 公開 第12回対面&オンライン講演会(対面とZoomのハイブリッド方式で実施)
「極秘原爆計画を排して新竹サイエンスパークが作られた話」(仮題)
矢吹晋氏(横浜市立大学名誉教授、当会学術顧問)
- 28日(金) 14:30 「将来検討委員会からの提言」会員説明会
- 28日(金) 16:00 会員暑気払い

7月の会議予定

4日(火) 13:00	国際交流委員会	20日(木) 13:00	理事会(第5回)
11日(火) 13:00	環境委員会	20日(木) 15:30	広報委員会
18日(火) 14:30	講演委員会(Zoom)	26日(水) 13:00	東北委員会

※下線は通常日程に変更あり。

みんなの 写真館



ISSN038610345
二〇二三年(令和五年)七月一日・毎月一日発行

「善隣」第五三七号(通卷八〇四)

発行所 〒一〇五〇〇〇四 東京都港区新橋一五五
一般社団法人 国際善隣協会
電話 〇三三五七三三〇五(番代表)